

9/27

展評

真榮城 與茂

おもい分かへれる。衣裳は着用する
ものによりて、染布・織布は異
なるが、間や用途を、それなり

れ意識しながら産業的ではなく個人の創作性を重視した作品が並ぶ。作り手自身の想いをいかに布、糸に注ぎ込むか

が作品制作の永遠のテーマとなるが、人の姿勢を感じ取らせる観る者を惹きつける。

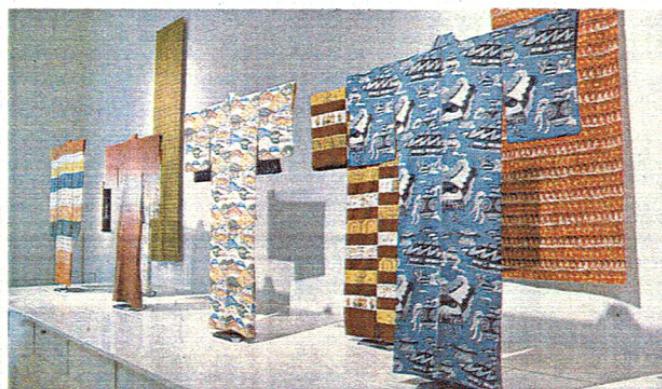
集の国威といふ場で間の如きの嚴しさを改めて願ひ。忠臣の恩恵を受けながらも独り直に一步踏み出さなければ新しい

絢はシンプルな小品だが絢の良さを十二分に感じさせ、大城志津子先生の「絹紫ぼかし両面浮花織」はあさやか

とが一致しないといふ話を耳にする事もあるが、「国展」は質量共に国内最大級の公募展であることに間違いない。

國學上卷

国画会工芸部 染・織



国展工芸沖縄展より展示風景=那覇市おもろまちの県立博物館
・美術館

国画会主催部の注縄タイムス
社の主催で「国展」(注縄展)
が開催されである。これは国
展が90回の節目を迎える記念
事業として、国画会工芸部の
現在の会員や準会員および入
選作品合わせて130点の展
示と、濱田庄司先生や芦沢鉢
介先生など注縄をつくり育
てた先生方の作品80点の特別
展示の2部構成になってお
り、その中での染、織の作品
について語した。

創作性と「用の美」追求

世界、作品の興行きを深めていたりする。染織品が田立つた。国内外の染織品の影響を受け、その地域の技法を製作に生かしていふ作品もあり、沖縄のかたじけない思ふれれる作品が多く見受けられる。

あるじの口の発する物語の音楽的な奏はれサイン、配色共に確かな技術で制作され、素朴の布地との調和も取れて心地よいシステムが伝わって来る。準会員優作賞の境明子氏の繪「布雨上がる」は紺技法を用いて建物の情景を表現し作中の展示空間も見事だ。他にも細かなデザインの絞り染めやわらかな色調の豊川美氏の

私がえつてくる。
人は「くなつても作品は残
り今日も観る人に語り掛け
る。私も作り手の一人自覺
している事だが、今更ながら
その凄さと厳しさを思った。
特別展の作品はいずれも圧倒
的な存在感を示しており、そ
れだけにもっと展示スペース
に余裕があればと思う。

の沖縄の役割を再認識し、沖縄から今、何を発信できるかと思いをめぐらせる絶好の展覧会である。また、これから工芸を志す若い方々や作品制作に励んでいる方々には大きな刺激となり、新たな発見の機会でもある。同館では日本民藝館80周年「沖縄の工芸展」が開催されています。

現在の会員や準会員および入選作品をわせて130点の展示と、濱田庄司先生や吉沢鉢介先生など上野館をついで育てた先生方の作品80点の特別展示の2部構成になつており、その中での染、織の作品について話したい。

特別展示では井沢先生の絵
染着物「雪屋」や「那覇
市」などの作品が楽しめます。
沖縄の情景が温かく心に響
く。柳原先生の紡綿技術塔

書會入室の「形の美」の追求に迷がな
らないと改めて感じている。
上巻の世界でもこれまで見た個
体の公論展がある。その中に
は団体の公報等と作品すべく

術大學教授)